

史 栄 著 作 考 ——『李長吉詩補注』を中心にして——

若 松 信 爾

九州女子大学 共通教育機構
北九州市八幡西区自由ヶ丘二二(千八〇七―八五八六)
(二〇一三年六月六日受付、二〇一三年七月十一日 受理)

はじめに

史栄(一六七五―一七五四)字は漢桓、一字は雪汀、鄆県の人。史栄という人物は著名とはいえないが、李賀詩の注釈史の中で『李長吉詩補注』の作者としてその名が散見する。史栄の伝とその著書については、全祖望(一七〇五―一七五五)の「史雪汀墓版文」等に記録されており、これらの伝を見てゆくと、この書は夙にその存在は知られていたが、内容については一切不明であった。日本で出版された、鈴木虎雄著『李長吉歌詩集』、荒井健著『李賀』、

原田憲雄著『李賀論考』等の著書でもその書名に言及するのみである。この点については中国においても同じ状況であった。このように書名のみ巷間に流布し、存否すら確認できなかったことについて、その原因は史栄の主著として常に『李長吉詩補注』が記録されているにもかかわらず、この書は遂に刊行されることはなく稿本として伝来し、またその所在すら一般には分らなかつたためである。しかし、二〇〇五年に袁慧氏が『天一閣文叢』第二輯において「史注李賀詩編出 諸家箋釋皆遜色」なる論文を発表す

るに及び、初めて『李長吉詩補注』の来歴と内容の概略が明らかになった。そこで本稿では史栄の人となりとその著作を概観考察し、更に袁慧氏の論文を軸に、史栄の主著である『李長吉詩補注』の内容を検討していくことにする。

一 史栄の人物像

史栄の伝については前述の全祖望の『全祖望集彙校集注』巻二十二に「史雪汀墓版文」があり、他に『国朝耆献類徵』四百三十五巻にも伝があるが内容は「史雪汀墓版文」をそのまま採録している。つまり全祖望の記した「史雪汀墓版文」(以下墓版文と略称する)は全祖望自身が生前の史栄と昵懇であり、親しく交際した上で記録された文であることから、その人物を知るには極めて重要な資料といえる。原田憲雄氏もこの文により史栄の人物像に言及している。(1)そこで袁慧氏の前掲論文に引用される資料をも参考にしつつ、「墓版文」を中心に史栄の人物像を見ていくことにする。史栄の先祖は「墓版文」にも「忠宣公の裔なり」(2)

とあるように、南宋の史忠宣公彌堅が先祖であり、また「墓版文」にある馮貞群の注には「雪汀の祖起欽、字は徳明。万曆十七年の進士、寧國府に知たり。續耆舊詩小傳に見ゆ」⁽³⁾とあるように鄭鼎でも史氏は名族といえるだろう。袁慧氏の論文には『李長吉詩補注』にある潘人瑞の序文が引用されており、そこには史榮の曾祖・祖父・父のことが記されている。

漢老（史榮の字は漢桓、故に尊びて漢老と謂ふ）の曾祖の字は國英、祖の字は際飛、父の字は日三。皆讀書砥行を以て庠序に名あり。際飛先生は全唐詩に熟し、嘗て全唐の句を貫穿し類韻若干卷を爲し、網羅して失ふ所無し。日三先生は金石を識り、古文を刻む。⁽⁴⁾

祖父の際飛は『全唐詩』を研究し、『韻類』という著作がある。また父の日三は金石の学に詳しかったという。『韻類』は佚して今に伝わらないが、これらの祖父・父の学業は後述する史榮の著作から考えると、その影響する所は多大であったことは間違いない。つづいて潘人瑞は史榮の若年の様子を以下の如くに記している。

漢老幼くして讀を祖より受け、稍く長じて父に随ひて青齊に遊ぶ。壯にして維揚に友教すること十年、盡く江東の名士を

識るを得たり。其の詩における、金石刻本における、庭訓を之ひ參するに名人の指畫を以てす。故に之を最も工みに爲す。

⁽⁵⁾ これを見れば史榮は若くして詩・金石の学に長じていたことが分かる。しかしその性格については「墓版文」によると、

雪汀賦性は狷なるも、然れども之を怪に失す。其の初年に當りては、一切を高視す。⁽⁶⁾

とあり、かなり狷介で傲慢な性格であったことがわかる。全祖望は史榮の奇矯な言動について次のようなエピソードを記している。

書法を善くし、又善くするに花乳の印石に篆雕するを以てす。矜貴過ぐることを甚だし。里中の黄戸部又堂・張河内萼山踵門して其の篆及び擘窠の書を求むるも、雪汀望望然として答へず。然ども其の許可する所なれば、則ち傾倒して役受けて厭はず。甚だしくは藩溷の間に至るまで、皆題署を爲し、下は童僕逮ぶも、亦た雕鏤を爲す。⁽⁷⁾

また謝国楨の『江浙訪書記』にも史榮の詩集『陶陶軒詩集』の項に陳権の跋文を引用し、

里中の黄戸部肖堂・張河内蓊山、踵門して以て求めるも答へず。意愜ふ所ならば、茶寮酒肆と雖も、毫を索むれば揮洒す。或ひは童子にも亦之に彫印を與ふ。(8)

とある。若干語句の違いはあるが、ほぼ同様の挿話と言つていいであろう。黄・張の二名はこれを詳らかにすることはできなかった。恐らくは地方の名士であろうか。これらの話から窺えるのは史栄が書法と篆刻を善くしたことである。しかし、氣が乗らなければ、如何に名士、貴顕であろうともこれを無視して憚らず。逆に入れば茶店や居酒屋、はては便所の額にまで揮毫し、子供の召使にまで印を彫つたという。ここに示されるのは史栄の好悪の感情の激しさである。かような性格が史栄の人間関係において禍いしたといえる。因みに「墓版文」中の巖元照の評に、巖元照が史栄の篆刻した印を所持してることが記されている。

余嘗て史先生の刻する所の印章一方を得る。朱文にして願學の二字ありて、果たして佳し。乃ち徳清の蔡學博丈環諭の贈る所、蔡丈は曾て史先生を見る者なり。(9)

せつかく才能をもつていながら、その偏狭な性情から交友関係は破綻してゆく、「墓版文」によると、人間関係悪化の記述が以下

の如くに記されている。

最も氣に任じ、一言合はざれば輒ち觸忤を成し、日に益々蕉萃し、非罪の縲繼に陥ること三たびして、此れを以て其の諸生たるを去ふ。平生の老友も、大半は凶終にして割席す。(10)

氣性激しく、相手と少しでも話が合わないと怒り逆らう。このようなことが度重なり、多くの人に恨まれたのであろう、冤罪で三回入獄し、その結果諸生の身分を剥奪されている。またその性格故に大抵の交友関係も絶交するにいたつている。ここに記されている冤罪事件は具体的に如何なるものであつたのかは不明である。しかし、『全祖望集彙校集注』にある「郭芥子墓誌銘」に冤罪に關連すると思われる事件が記載されている。

同里の史雪汀は、卜狷の士なり。(郭芥子) 先生之と厚し、其の婚に會するも、非罪の縲綬を以て官に訟繫せらる。先生代はりて之が爲に禁を吏より受くること浹旬、事解けて乃ち去る。然れども雪汀骯髒にして友朋と乖迕し易し、卒に弓影の疑を以て絶を先生に告ぐ、是れより道中相見るも復び揖せず。先生の弟子憤ること甚しきも、先生は怡然として介意せず。故に先生と雪汀の居と僅かに一湖水を隔てるも、三十年間問問を通ぜず。或ひは其の事に及ぶ者有るも、先生輒ち他

語を以て之を亂す。乃ち雪汀卒に亦た自ら悔ゆ、先生の卒するに及び、扶杖して過ぎ其の喪に臨み、棺を撫し長慟して去る。(1)

要約すると郭永麟、字は芥子は史榮と友人関係であった。史榮の結婚式の時でのことであろうか、史榮は冤罪で訴えられてしまふ。そこで郭芥子が身代りになり、十日間ばかり獄につながれた後釈放された。しかし史榮は友人関係をうまく保てない性質であった。ここにいう「骯髒」とは剛直という意味もあるが、卑鄙という意味もある。文意からすると両方意味が当てはまるような気がする。結局恩人ともいえる郭芥子に対して、何らかの誤解をし、絶交を宣告してしまう。その後道で会つても挨拶せず、三十年間そのような状態が続いた。郭芥子の弟子は史榮に対し怒っていたが、郭本人は意に介せず、また他人が史榮の件を話題にすると、他の話をして話題を変えた。史榮もしだいに自ら悔いる所があり、郭芥子の葬儀の時には、杖をついて参列し棺桶を撫でて慟哭したという。ここにおいても史榮の強情で歪んだ性格が看取されるが、「雪汀卒に亦た自ら悔ゆ」という記述が史榮の複雑な感情を示しているようである。

一方、周囲からこのように記された史榮であるが、門人である姜炳璋(乾隆十九年の進士、同期に紀昀・錢大昕がいる)は史榮が述懐した、交友の道を以下のように記録する。

余(姜炳璋)嘗て従容として請ふて曰く、先生の楽しみは朋友に有りや。と。先生愀然として曰く、予生平朋友を以て性命と爲すも、白首の相知も一旦事有らば則ち羣れて石を下す。友道の喪はれたること久し。是を以て二十年門を杜ざし、跡を掃ひて悔いざるなり。(2)

これを見ると、史榮自身交友関係を大事にする考えはある。また具体的に示されていないが、史榮独自の朋友の道があつた如くに考えられる。それが世の中の常識と合致しないがために、多くのトラブルが生じたのではなからうか。続いて姜炳璋は一般的にいわれている史榮の人物像は事実と反するとして、

世の先生を論ずる者は、多く自負太だ高きを以て、先生の病と爲す。即ち先生を知る者も亦曰く、先生と交わるは異書を讀むが如く、當に其の奇文に耐へるべし。字を斷ずるや、名山に登るが如く、當に其の險絶に耐へるべし。と。余竊かに以爲へらく然らず、先生は至性の人なり。它に論ずる無し。其の一事を論ずれば、蒼水・張公、命を杭に畢へる。先生九歳の時其の事を聞き、位を爲り之を哭すること甚だし、哀察するに文を以てす。人或ひは之を笑ひて顧みざるなり。杭に至る毎に必ず其の墓に奠し、今に至るまで語次輒ち哽咽し聲

を失ふ。然らば則ち先生敦名厲行の心、其れ性の然るに殆きか。是れ故人は偽を以てするも、先生は誠を以てす。人娵を以てするも、先生は質直を以てす。(13)

と述べる。つまり、史榮が「至性の人」であるとして、その一例として張煌言を祭つた例を挙げ、また「至性の人」であるが故に、多くの友人や俗人と反目したとしている。また、潘人瑞も史榮との交友に関して、姜炳璋とほぼ同様の記述をしている。

漢老と交はるは、名山に遊ぶが如く、當に崆山の兇にして靡鬱たるに耐へるべく、異書を読むが如く、當にその僻字斷文、句讀すべからざるに耐へるべし。漢老の人文は實に瑕有るの玉爲り、而して人々に求めるに瑕無きの石を以てす。其の齟齬して詆毀するは宜なり。(14)

袁慧氏は潘人瑞の「瑕有るの玉」という史榮に対する評価を妥当であるとしている。(15) 史榮の晩年は不遇であつた。全祖望が「墓版文」に記す所によると、次の如くである。

然りと雖も、雪汀の平生は實に傷む可き者有り。雪汀雅より小學に精く、喜みて注疏を読み、唯だ先儒の説に阿るを肯ぜず。十七史及び文選に熟精し、其の諤諤として可とする所少

なきや、乃ち其の本色なり。連蹇すると雖も、要するに畸士爲るを失はず。暮齒の頽唐するに至りて、盡く學ぶ所を棄つるも、殊に其の意に非ず。是れ惟だ予のみ能く之を知るを爲す。雪汀頗る予の之を非議するを憂ふるなり。故に頻年予の門を過ぎらんことを希ひ、間々或ひは其の後言せること有るを傳ふ。然ども予客遊して歸れば、或ひは過ぎりて之を省視し、雪汀往往にして手を握り相視て、歎歎として無言なり。嗚呼、誰か雪汀竟に垂老を以て志を喪ふと謂はんや。(16)

これを見ると全祖望は史榮より三十歳ばかり年少であつたが、史榮より全幅の信頼を得ていたようである。全祖望は乾隆元年の進士であり、無位無官の史榮とは地位声望ともに異なる存在であつた。しかし、『全祖望集彙校集注』を見ると、そこには「答史雪汀論孔門人弟子帖子」「答史雪汀問宋瀛國公遺事帖子」「答史雪汀問十六國春秋書」「答史雪汀問六陵遺事書」「與史雪汀論行朝録書」等が収められており、両者の交際の深かつたことが理解できる。晩年の史榮は全祖望の学識に多大な敬意を懐いており、全祖望に『李長吉詩補注』等を含む自著への序文を求めているが、全祖望はそれに対し婉曲に拒否している。

皆予の序を索む。予未だ之に應ぜず、雪汀是れを以て慍る。

予之に諧れて曰く、論定は待つ有るなり。と。予粵より歸るに及び、雪汀卒す。(17)

短文ではあるが「史雪汀李長吉詩注序」のみが存在するが、内容は序文とは言い難いものであり、全祖望が如何なる理由でこれらの序文を拒否したのか判然としない。序文を得ることができなかつた史榮は乾隆十九年に没した。享年七十九歳である。墓版文にはこの不遇の才人を悼み、次の銘を記して終わっている。

鸞翻振るう可からず、狼疾瘳ゆる可からず、故人中聲を弾じ、君が爲に磊砢勃窣の牢愁を一洗せん。(18)

二 史榮の詩風と著作

「墓版文」によると、史榮の詩風は凡そ四回ほど変わったと述べている。

雪汀少くして即ち喜みて詩を爲る。是の時に當りて、鄆の細湖は詩人多し、大率宗正菴の門に出づ。正菴の詩は本より竟陵を師法とす、稍く面目を改むるも、未だ故歩を洗はざるなり。雪汀稍く其の非を悟り、變じて山谷と爲す、已にして其の生澁を嫌ひ、又一變して玉川と爲る。晩に乃ち信筆して復た作意せず、遂に誠齋と爲る。然れども其の實は誠齋を學

ぶも之を失ふ者なり。蓋し雪汀の詩は凡そ四變して、遇益々窮まり、才も亦益々落つ、悲しいかな。(19)

つまり、史榮の詩は最初に鄆の宗誼の詩風を学んだが、宗誼の竟陵派の詩風を否定し黄庭堅の詩を模倣した。しばらくするとその生澁さを嫌い、転じて盧全の詩風を学び、晩年は楊万里を範としたが、その作る所の詩は楊万里に学んだものとはいい難いものであつたという。詩風を四回変じたが、史榮の生活は困窮し、才能も衰えいつたと記している。ここで少々不思議に感じられるのは、『李長吉詩補注』の作者でありながら、その詩風に李賀詩の影響があつたという記述が窺えないことである。

史榮の詩壇における活動については、「墓版文」に冤罪に陥れられ、友人達と絶交したという記述の後に以下の如くに伝えられている。

乃ち忽ち未契を年少に託し、但だ其の門に登る者有らば、口を極めて之を稱せざるは無し。里中の昨暮の児、以へらく雪汀故らに謬謬として可とする所少なきも、今忽ち與し易きなり。是に由り雪汀の門牆、驟かに盛んになる。一たび唱すれば十和し、丹黃昕夕に間無し、其の欣賞淋漓たり、真に遇ふ所は皆作者なるを覺ゆ。是に其の門に登る者は、謂へらく人必ずしも學ばず、謂へらく詩・古文詞は必ずしも宗傳せず、

謂へらく流品は必ずしも裁量せず、方言里諺、皆詩材に供す、雪汀兀兀として手鈔し、同聲集四十巻を爲す。吾が郷の吟社、久しく替はり、是に至りて忽ち争ひて雪汀の詩派を傳ふるも、雪汀の風格は驟かに衰ふ。⁽²⁰⁾

これを見ると史榮の詩社には若者がずいぶん集まったようである。袁慧氏も史榮の文名は甚だ高く、多くの若い学生が史榮の門下に入ることを希望したと述べている。⁽²¹⁾「墓版文」をみると詩の作風はかなり自由な雰囲気であり、その唱和の様子を史榮自らの『同聲集』四十巻にまとめたという。そして詩社は隆盛していったが、史榮自身の詩の作風は衰えたと述べている。また『同聲集』は現在佚して伝わらないようである。では史榮の詩は如何なるものであったのか。史榮の詩集では『陶陶軒詩集』十巻（この書の所在については後述）があるが、鈔本として伝わるのみである。謝国楨は『江浙訪書記』所載の「陶陶軒詩集」の項に「暮秋感懷詩」一首を鈔出している。

西風葉を吹きて梧桐に到る。歴亂す殘陽野草の中。細やかに一庭を掃ひ夕曇を供し、淨めて兩眼を攄れば飛鴻を數ふ。涙は滴露の如く偏に冷め難く、語は啼螿に似て未だ肯へて窮まらず。自ら許す此の身曾ては薄からず。連朝何れの時にか却りて匆匆たらん。⁽²²⁾

謝国楨はこの詩を非凡とし、浙東の詩家たるに愧じない作としている。⁽²³⁾ 他には門人の姜炳璋が史榮の詩句で最も人口に膾炙したものととして次の詩句を引用する。

類書韻府家家有り、殺し盡す千秋好學の人。識者、以て名言と爲す⁽²⁴⁾

また同文に史榮の詩風を評している部分があり、

感ずる所有れば、輒ち詩に形はず。其の詩を論ずるに性靈を以て主と爲し、雕琢を事とせず、渾然として天成す。⁽²⁵⁾

と記しているが、詩集が上梓されていないため、現時点ではその詩風を具体的に示し得ない。

次に史榮の著作全般について述べる。「墓版文」における記述では『李長吉詩補注』・『風雅遺音』・『竹東集』が有り、『風雅遺音』のみが世に行われたと記している。『竹東集』については馮貞羣の注に『陶陶軒詩集』の巻一から三巻までが『竹西集』とあり、『竹東集』は『竹西集』の誤りであると指摘する。⁽²⁶⁾ 姜炳璋の文には史榮の著作として、

六書の譌誤を考正し、金石の刻を取り、旁ら子史百家の言を
參し、同書一百二十卷を著す。今名を字典箋補に易ふるは、
明人の正韻牋の例に仿ふなり。(中略)箋補而外、楚詞・杜詩・
史記・漢書の評解若干卷を著す。又歴代の天官志・唐百家詩
及び莊・列若干卷に註す。皆會稽の陶氏に蔵す。其の鄞に在
る者は、惟だ李長吉補註二十卷・雙聲疊韻補六卷・越東待問
録五卷及び風雅遺音のみ。⁽²⁶⁾

という書名を挙げてゐる。これによると史榮の著作は門人であつた會稽の陶燮が蔵するものと、鄞にあるものとの二箇所に存在したという。袁慧氏の論文には『李長吉補注』・『風雅遺音』を除き、他の著作について『鄞県通志』の記載する所に従い、『双声疊韻譜』四卷・『詩經集伝切音』四卷・『四書集注切音』・『爾雅切音』・『方言古音録』十卷・『同書』七十卷・『康熙字典箋補』二十卷・『越東待問編』五卷・『陶陶軒詩集』十二卷・『四朝名人絶句選』・『同声集』四十卷・『離騷集解』一卷・『詩人通俗文』十卷を挙げている。⁽²⁷⁾姜炳璋の文と『鄞県通志』の記述を比較すると、姜炳璋は『同書』と『字典箋補』を同一の書とするが、『鄞県通志』は別の書とみなし、また、『詩經集伝切音』・『四書集注切音』・『爾雅切音』・『方言古音録』・『四朝名人絶句選』・『詩人通俗文』等の書名は『鄞県通志』のみに記録する。『離騷集解』は姜炳璋の「楚詞・杜詩・史記・漢書の評解若干を著す」という記述に含まれる

と考えられ、他に卷数の相違がある点が目立つ。以上が史榮の著作とされるものであるが、現時点で所在が確認できる著書としては『風雅遺音』・『李長吉補注』・『陶陶軒詩集』であり、しかも上梓されたものは『風雅遺音』のみである。『風雅遺音』の出版経緯について、史榮は序文において次のように記述している。

陸氏の釋文は漢より以來相傳の音讀なり。詩は毛・鄭を主とすると雖も、韓詩内外の傳と王肅・徐邈・沈重の諸儒との異同の説も亦之に音を載すること多ければ、則ち九家を兼備す。後來の者度るも別ちて一讀を爲す能はざるなり。朱子は集傳を作り、惟だ小序を信ぜざるのみ。其の傳箋及び孔疏に於いては相仍る者、殆ど十の五・六、豈に反りて釋文を置きて用ひらざらんや。然れども今本載せる所の音は、釋文と乖くのみならず、集傳中の語も時に或ひは之に背けば、則ち朱子の手定に非るは明らかなり。顧亭林の日知録に朱子其の門人をして之を爲らしむ。と。吾謂へらく門人の親炙せるは素より有るも、又其の師の命を以てして、何ぞ忽視すること此の如きや。恐らくは亦た非ならん。間々朱竹垞の經義考に於いて、文公の後人朱鑑の作る所の詩傳遺集後序有るを見れば、乃ち當時は本より音有るも未だ備はらざるを知る。然らば、則ち今の音は、蓋し誰何の人の其の未だ備はらざるに因りて、世俗の譌誤の音を取りて、其の間に竄入せしかを知らざるなり。

(中略) 流傳數百年、世の儒咸信じて朱子の手定と爲して、其の誤りを知る莫し。即ち之を知るも亦た敢へて言ふ莫く、已に誣ひざらんや。吾年二十の時、稍く句讀を解してより、即ち私かに疑ひを訂正せんと欲するも、未だ決せず。此れを懐ふこと五十年、今年且に七十ならんとす。若し一言せずんば、恐らくは後世終に復た之を言ふ者無からん。(28)

つまり、『風雅遺音』の主旨は朱子の『詩集伝』における音韻上の矛盾を分析し、『詩集伝』に書かれた音は朱子の手定ではなく、後人の竄入があることを考証したものであった。門人の姜炳璋・陶燮の各序跋においてそれぞれこの書について「紫陽の諍臣」・「朱子の功臣」という賛辞が贈られている。(29) 『風雅遺音』は史榮の自序に乾隆八年五月二十六日とあり、陶燮の跋にも同年十一月の記載がある。そのため一応この書を乾隆八年序刊本とする。その後乾隆八年序刊本は、姜炳璋を介して紀昀(一七二四〜一八〇五)の見る所となる。紀昀は乾隆八年序刊本の譌誤を訂正し、『審定風雅遺音』として世に出した。紀昀の序文には以下の如く記している。

甲戌夏、同年の姜君白巖、雪汀の風雅遺音を持ちて予に贈る、曰く雪汀歿後、其の門人毛兄弟の刻する所なり。と。時に匆勿にして未だ觀るに及ばず、己卯夏、始めて卒に之を讀み、

其の心を用ひること精且つ密なるを嘆ず。(30)

甲戌は乾隆十九年であり、この年は史榮の没した年でもある。姜炳璋の言の如くであれば、春頃には史榮は没していたのであろうか。また没後に乾隆八年序刊本を劖劂に付したとするならば、成書の後十一年間上梓されなかったことになる。経済的な問題で遅延したのであろうか。乾隆八年序刊本出版の年については再考の余地がある。紀昀は多忙のため乾隆二十四年に始めてこの書を読了し、其の内容に感心したことを述べている。続いて、

夫れ聲音の道は、說經の末務なり。然れども字音明らかならざれば、則ち字訓俱に舛ひ、聖賢の微言大義に於いて、乖隔して通ぜざるに至る。關する所細やかと謂ふ可からず。諸史の志・藝文に、必ず小學を經類に附するは、豈に謂はれ無からんや。昔陸德明經典釋文を作り、千餘年來學者奉じて著蔡と爲す。此の書、集傳以外に於いては發明する所無きは、固より敢へて陸氏と齒せず。而れども人人習讀の書に因りて、其の譌謬を救正し、之を以て俗學を針砭するは、較ほ信從し易し。獨り其の古音を知らざるを惜しむ。故に叶韻の説舛誤多し、又門目太だ瑣にして、辨難太だ激しく、著書の體に於いても亦微しく乖く。退食の暇、重ねて編録を爲し、汰だ繁なるは簡に就け、瑕を棄て瑜を取る。之を原書に較ぶれば

完書と爲るに似たり。其の文損する所有るも益す所無し、潤飾する所あるも其の意旨を更めず。亦曰く、此れ仍ほ史氏の書なり、予は與かる無きのみ。と。時に休寧の戴君東原子の家に主る。去取の間、參酌に資すること多し。恨むらくは白巖遠く象山に在りて、未だ共に一審定することを獲ざるなり。

(31)

と記している。審定にあたっては戴震（一七二三〜一七七七）も協力し、史榮が古韻学を理解していないために生じた、叶韻の説における誤謬、また冗長な部分を削除したと述べている。『風雅遺音』は清代考拋学の観点から有意義な著作と認められ、『四庫全書総目提要』・『詩集伝』の項にも引用され、『存目』にも「蓋し考證に頗る長ずる所有るも、蕪雜なるは亦未だ免れざる所なり」と記されている。この書は史榮の代表作といえるであろう。次に『陶陶軒詩集』であるが、「墓版文」にある馮貞羣の注によると次のように記されている。

吾友孫翔熊、家淮の藏に陳權の録字山房の寫本、陶陶軒詩集十二卷四冊有り。卷一より二に之るまでは竹西集、卷三は竹西後集、卷四は吾晦集、卷五は會吟集、卷六は岐亭詩韻唱和集、卷七は揮杯集、卷八は會吟後集、卷九は清谿倦游集、卷十より十一に之るまでは誦誦集、卷十二は嚶其集。康熙乙亥、

雪汀年二十一より起り、乾隆戊辰、雪汀年七十四に終はる。十集を計分するに、編年の例を以て之を次ぐ。(33)

これを見ると『陶陶軒詩集』は孫翔熊の藏書であつたことがわかる。この書についての消息は、謝国楨の『江浙訪書記』に

『陶陶軒詩稿』十卷 天一閣取進、伏附室馮氏旧藏、浙江省文南會印本。清甬上の史榮雪汀の著。後學林璋瑛鈔。

『陶陶軒詩集』十卷 天一閣取進、伏附室馮氏旧藏、録字山房鈔本。(34)

とあり、孫翔熊から馮貞羣の藏書となり、現在は天一閣の藏する所となつている。この二種の詩集は今まで世上に流布されることなく鈔本のみで伝わっているため、具体的内容については不明である。

三、史榮の『李長吉詩補注』について

史榮自身が最も意を注いだとされる『李長吉補注』の存在は、中国ではなく、むしろ日本の研究者のほうが目してきたといえる。鈴木虎雄氏の岩波文庫『李長吉歌詩集』の解説において昭和二十八年に行われた「李長吉詩集刊本展観目録」が掲載されてお

り、そこに史榮の『李長吉補注』書名が挙げられている。荒井健氏の岩波書店刊中国詩人選集『李賀』には、「ずばぬけて詳細な注釈であろうと想像される、清代の史榮の『李長吉歌詩補注十八卷附日本五卷年譜一卷附録一卷首一卷』を見ることでできなかったのは残念である」⁽³⁵⁾と記されている。前述したように原田憲雄氏は『李賀研究』創刊号・四号・八号の雑記において史榮について言及しており、全祖望の「墓版文」等の文から様々な推測をしている。その結果、『李賀研究』八号の雑記に「史雪汀注李長吉詩統」と題し、そこで『春酒堂遺書』『春酒堂遺書編校所拋旧本・詩話』中の「任沛齋陋軒藏写本」の下にある双注「史雪汀李長吉詩注・徐綺城四明談助に引く所を以て校過す」とある文言に注目し、「春酒堂遺書総目」にある馮貞羣の文と勘案して、一九一七〜一九三二年頃まで『李長吉詩補注』は確実に存在していたと述べている。⁽³⁶⁾

この文が発表されたのは一九七三年であり、未だ『江浙訪書記』は出版されておらず、原田氏は馮貞羣が『李長吉詩補注』の所蔵者であり、その後天一閣の蔵書になったことなど知る由もなく、当時としては『李長吉詩補注』の存否に関する情報はこれが限界であったであろう。中国においては多くの李賀詩の注釈書が出ているが、史榮の注釈が引用されている形跡はない。袁慧氏は王琦の『李長吉詩歌滙解』が史榮の『李長吉詩補注』言及していないのは、『李長吉詩補注』が上梓されることなく、鈔本のまま蔵書

家が保管していたため、当然世間の人はその存在を知らなかったのである。⁽³⁷⁾としている。この点は確かに理由一つとして挙げられるであろう。しかし、二〇一二年に中華書局から出版された、李賀詩集の最新版ともいえる呉企明の『李長吉詩歌編年箋注』には「李賀年譜新編」中に現在存在する李賀詩の注釈書を列し、

史榮《李長吉詩補注》四卷、外集二卷、復古堂舊本五卷、年譜一卷、附録九卷首一卷、慈溪の馮氏伏附室稿本を藏し、今は浙江寧波の天一閣に藏す。⁽³⁸⁾

と記しているにもかかわらず、まったく参考にしていない。これは何故であろうか。恐らく「墓版文」にある以下の文言に、その原因があるのではないだろうか。

雪汀著す所に、李長吉詩注幾んど三尺許り有り。其の最も自負する者なるも、予甚だしくは許さず。⁽³⁹⁾

また、前述した「史雪汀李長吉詩注序」において記した内容も、『李長吉補注』には一切触れず、謝国楨はこれを「嘲笑の辞」⁽⁴⁰⁾としているが、真に人に奇異な感を与える。以下その内容を記すと、

世に傳はる荊公の昌谷の詩を讀みて、譏る所の雁門太守の語、

蔡寬夫の詩説之を辨じ、以て此れ詩を知らざる者の言と爲す。必ず荆公の有る所に非るも、然れども未だ以て之を明證する者あらず。近ごろ偶々臨川集の古風集句吳顯道を送るの一篇、滕王の高閣江渚に臨み、東邊は日出でて西邊は雨ふる。を憶ふ、荆公此の句を取ること有るは、則ち世に傳ふる所、真に老頭中の附會のみ。予の友史雪汀昌谷詩に注し、予に序を爲さんことを屬す。予此の簡を書し、以て之を卷末に附さんことを請ふ。雍正癸卯正月望日⁽⁴¹⁾

大儒全祖望のこれらの発言が『李長吉補注』に対して、誤謬に満ちた注釈書であるかのような印象を与え続けたのではないかと考えられる。事実原田氏も『李賀研究』第四号「雜記・狼疾」に「恩人に背き、故人に顧みられなくなった雪汀をしばば訪うたというから、全氏はかれにとつての最も篤厚な友であった。その友情をもつてもかく記さざるを得ぬとすれば、雪汀の注はほとんど見るべきものがなかつたろうと推察される」⁽⁴²⁾と書している。そして全祖望のこの発言が影響し、現在至るまで所蔵先が判明しているにもかかわらず、『李長吉補注』は見るに及ばない書として無視している可能性がある。

馮貞羣の『李長吉補注』について記している部分を見ると、

是の書凡そ十八卷、雪汀の生平精力の萃る所と爲る。首に復

古堂本長吉詩集白文五卷を冠す。年譜一卷、末は則ち附録殿たり。其の書先づ劉辰翁・吳西泉の諸家の補注を列し、引申繁博、考證詳明、人をして長吉詩中の隸ふ所源有り本有るを知らしめ、以て力めて杜牧の牛鬼蛇神の説を闢せんと欲す。句毎の注千餘言を下らず、全書計二十萬言、凡そ二十巨冊。余己酉冬日に、重價を以て王斗瞻の後人の處従り之を得。⁽⁴³⁾

とあり、謝国楨『江浙訪書記』の『李長吉補注』の項によると、

清の甬東、史榮の補注。是の書馮貞羣先生の旧藏原稿本。前に康熙五十八年の潘人瑞・門人陶燮の序、道光三十年王奎の序、姜白岩の小札、陳常の跋、毛昇・柴可安の識有り。⁽⁴⁴⁾

として、続いて馮貞羣の跋文を引用し前記の文とほぼ同様の文を載せるが、馮貞羣はこの書の欠点として、「往往穿鑿附会にして之を失す」⁽⁴⁵⁾と述べている。しかし、如何なる部分がそれに当たるのかは明示されていない。

次に『李長吉詩補注』の天一閣に所蔵されるまでの経路であるが、袁慧氏の論文には王奎（字斗瞻）の題記を引用し其の詳細が述べられている。以下その部分を鈔出してみる。

一日、馬銘軒我を過り、近ごろ舊書を西郊の毛氏より収む、

其の中経見せざるの書多しと謂ふ。余往きて之を視れば、是に所謂長吉詩注（李長吉詩補注）五本を見るを得。皆手印有りて其の首に鈐識す、狂喜に勝へず。其の目録を查べるに、十八卷有り、才かに四分の一を得る。第二本は已に鼠囓るも殘存す（後張載衡處の四易稿に従ひ之を補ふ）。銘軒以て意を爲さず。余遂に之を取りて歸るも、餘の十五卷は誰の手に落ちるかを知らず。到る處尋訪すること十餘年、偶々繭齋林丈と談及び云ふ、此の書我が家に十本有り、之を外家の後倉の王氏より得（別の）十本は西郊の毛氏に藏す。と。（中略）故に銘軒の収める所は僅かに五本のみ、而して五本は尚毛氏に藏す。余是に重價を惜しまず、將に繭齋藏する所の十本取歸せんとし、而して毛氏の五本は再三之を求むるも、出ずを肯へんぜず。又二十餘年、范君月樹書を我に致し、毛氏近日式微にして、此の書價を出さば售らんと云ふ。之を索れば、只四本有るのみにして、尚其の一を缺く。後人故紙の堆中之を得。百余年の後、散ずるも複合す、真の大快事なり。此の書余に遇はざれば、亦散失して傳はる無きに幾くして、先生の數十年の精力、五たび稿を易へて後成るも、一旦草木と俱に腐るは、亦大いに惜しむ可からざらんや。⁽⁴⁶⁾

これによると、『李長吉詩補注』は史榮の没後、毛氏の所に十冊・王氏の所に十冊というように分割されて所蔵されていた。それを

王奎が長い年月をかけて、大金を以て購入し完本の形に戻したことが分かる。その後宣統元年に已に述べた如く王奎の子孫から、馮貞羣が購入する。馮貞羣は死ぬ間際に國家にその藏書を寄贈することを希望し、現在は天一閣の所蔵本となっている。

『李長吉詩補注』の版式についてであるが、袁慧氏によると「幅は19・5×29・5センチメートルであり、紙面に外枠のようなものはない。毎半頁二十行、行二十四字、毎頁計九百六十字、毎冊平均して百頁強ぐらいであり、約十万字ほど有る。合計して二十一冊、二千七百三十頁で、総字数は約二百六十万から二百七十万の間である。（中略）『補注』は端正な小楷を用いて清書されており、二王の書風で筆力は力強い、字の大きさは平均的で、その書の技術は老成している。一部分の小楷は更に上品に見え、王獻之の靈飛の風情を含んでいるのが、弟子である会稽の陶燮の手跡と思われる。毎巻首頁及び序跋の間に「史榮」（白文）・「漢老」（朱文）の小文の印及び「不忘著歌人姓李」（白文方印）、「尋章摘句老雕虫」（楕円形朱文）等遊印の鈐印があり、そして門人陶燮の「陶燮之印」の白文章「津天」の朱文章（津天は陶燮の字）の印が押してある。またこの書の最後の藏書者の伏附室の藏書印と「貞羣」（白文方印）の私章の押印がある。（中略）この書の完成年月は潘人瑞・陶燮の序跋から考えると、康熙五十七年（一七一八年）頃である⁽⁴⁷⁾とある。これを見ると『李長吉詩補注』は史榮が四十三、四歳の時に一応の完成したといっている。前述したように全祖望

の序文が雍正元年であることを考えると、この時期の完成で間違いないであろう。

『李長吉補注』の具体的内容が如何なるものであつたのかについては、現在のところこれも袁慧氏の論文に引用する部分からしか窺うほかはない。氏は李賀詩の「詠懷」の『補注』を例として挙げている。

補注に則ち曰く、説文云ふ、懷は思念なり。又詩・小雅に懷ふと毎ども及ぶこと靡しと。箋に云ふ、私を懷ふなり。と。又文選の注に蒼頡篇を引きて云う、懷は抱なり。と。按ずるに、後人多く胸臆を謂ひて懷抱と爲す。此の詠懷は亦吟詠の懷抱を謂ふのみ。然らざれば、則ち己の思念する所を詠するなり。文選の阮籍詠懷十七首の題注に顔延年曰く、説く者阮籍晋代に在りて、常に禍患を慮る、故に此の詠を發するのみと載す。其の首篇の注に云ふ、嗣宗身は亂朝に仕へ、常に謗りに罹り禍に遇ふことを恐れ、因りて茲に詠を發し、故に毎に憂生の嗟き有り。志は刺譏に在りと雖も、文に隱避多し、百代の下、情を以て測り難し。云々⁽⁴⁸⁾

これを見ると李賀詩の「詠懷」という詩題の考察から始まつており、その考拠は博引傍証というべきで、袁慧氏は「詠懷」の注釈について王琦が七五六文字なのに対し、史榮は一万二百字であると

述べている。⁽⁴⁹⁾つまり『李長吉詩補注』が李賀詩の注釈史上詳細を極めたものであることが理解できる。謝国楨の『江浙訪書記』によると、かつて張壽鏞は『四明叢書』に『李長吉詩補注』を入れようとしたが、その量の多さから断念したと述べ、史榮の注は冗長の病があるが、李賀の研究においては参考になるため、『李長吉詩補注』の複製を作り、各図書館に配備すべきであるとしている。⁽⁵⁰⁾しかし、現在に至るまで天一閣に蔵せられたままで、容易に見ることができないままである。

おわりに

以上史榮の人物像とその著述を概観してきたが、『風雅遺音』の著作以外は、散逸するか、鈔本のみが存在するのみである。『陶陶軒詩集』・『李長吉詩補注』については天一閣所蔵の孤本のため、今回は周辺資料により言及するにとどまった。しかし、『天一閣文叢』第二に掲載された論文である袁慧氏の「史注李賀詩編出諸家箋釋皆遜色」発表により、『李長吉詩補注』に関する貴重な情報を得ることができたのは幸運であつた。これらを総合して史榮の著作検討してゆくと、その特徴として顕著なのは清代考拠学的な研究姿勢である。『風雅遺音』がその典型的な著作といえるであろう。また、『李長吉詩補注』はその考拠学的研究方法を経書のみならず、文学研究に応用したものと推測できる。このような例は吉川幸次郎によると、錢謙益(二五八二〜一六六四)の『杜

『工部集箋注』を嚆矢とするとしている。^①史榮の李賀詩に対する注釈も方法論としては、恐らくそれと相似したものである可能性がある。

今後の課題としては袁慧氏も提言しているが、『陶陶軒詩集』、『李長吉詩補注』の全文出版が望まれる。これらの著作の全容を解明することにより、『陶陶軒詩集』では史榮の詩風の如何とその人間関係を明瞭にし、『李長吉詩補注』においては具体的に全祖望がこの書の何を非としたのか等を検討することで、『李長吉詩補注』の李賀詩の注釈史上における正確な位置づけが可能になると考えられる。

注

- (1) 原田憲雄『李賀論考』朋友学術叢書 一九八〇年 六六九頁・六九四頁 原田憲雄『李賀研究』八号 方向社 一九七三年 四三九頁
- (2) 全祖望撰・朱鑄禹彙校集注『全祖望集彙校集注』上海古籍出版社 二〇〇〇年 四〇六頁
- (3) 前掲書 四〇六頁「雪汀之祖起欽、字德明、萬歷十七年進士、知寧國府、見續著舊詩少傳」
- (4) 袁慧「史注李賀詩編出 諸家箋釋皆遜色——論史榮稿本《李長吉詩補注》在學術上和文獻上的價值」『天一閣文叢』第

二輯所収 寧波出版社 二〇〇五年 一一五頁「漢老(史榮字漢桓、故尊謂漢老)曾祖字國英、祖字際飛、父字日三、皆以讀書砥行名庠序。際飛先生熟全唐詩、嘗貫穿全唐句爲類韻若干卷、網羅無所失。日三先生識金石、刻古文」(論文に引用されている原文は簡体字のため、すべて繁体字に改めた。以下同じ)

(5) 袁慧 前掲論文 一一五頁「漢老幼受于讀、稍長隨父青齊、壯而友教維揚者十年、得盡識江東名士。其于詩、于金石刻本、之庭訓參以名人指畫、故爲之最工」

(6) 全祖望撰 前掲書 四〇四頁「雪汀賦性狷、然失之怪。當其初年、高視一切」

(7) 全祖望撰 前掲書 四〇四頁「善書法、又善以篆雕花乳印石、矜賞過甚。里中黃戶部又堂・張河内萼山踵門求其篆及擘窠書、雪汀望望不答、然其所許可、則傾倒受役使不厭、甚至藩溷之間、皆題署、下逮童僕、亦爲雕鐫」

(8) 謝國楨『江浙訪書記』三聯書店 二〇〇八年 一四六頁「里中黃戶部肖堂・張河内萼山、踵門以求不答。意所愜、雖茶寮酒肆、索毫揮洒、或童子亦與之雕印」(原文は簡体字であるため、繁体字に改めた。以下同じ)

(9) 全祖望撰 前掲書 四〇六頁「余嘗得史先生所刻印章一方、朱文願學二字、果佳、乃德清蔡學博丈環黼所贈、蔡丈曾見史先生者」

- (10) 全祖望撰 前掲書 四〇四頁「最任氣、一言不合、輒成觸忤、日益蕉萃、陷于非罪之繚紲者三、以此去其諸生。平生老友、大半凶終割席」
- (11) 全祖望撰 前掲書 四〇〇、四〇一頁「同里史雪汀、下涓之士也。先生與之厚、會其婚、而以非罪縲紲繫于官、先生代爲之受禁于吏者浹旬、事解乃去。然雪汀航髒、易與友朋乖迕、卒以弓影之疑、告絕于先生、自是道中相見不復揖。先生之弟子憤甚、先生怡然不以介意。故先生與雪汀居僅隔一湖水、而三十年不通問問。或有及其事者、先生輒以他語亂之。乃雪汀卒亦自悔、及先生卒、扶杖過臨其喪、撫棺長慟而去」
- (12) 史榮『風雅遺音』乾隆八年序刊本 三葉「余嘗從容請曰、先生樂有朋友乎。先生愀然曰、予生平以朋友爲性命、而白首相知一旦有事、則羣焉下石、友道之喪久矣。是以二十年、杜門掃跡而不悔也」
- (13) 史榮 前掲書 四葉「世之論先生者、多以自負太高、爲先生病。卽知先生者亦曰、與先生交、如讀異書、當耐其奇文、斷字、如登山、當耐其險絕。余竊以爲不然、先生至性人也、它無論。論其一事、蒼水張公、畢命於杭、先生年九歲、時間其事、爲位哭之甚、哀祭以文、人或笑之不顧也。每至杭、必奠於其墓、至今語次、輒哽咽失聲、然則先生敦名厲行之心、其殆性然耶。是故人以僞、先生以誠、人媿媿、先生以質直」
- (14) 袁慧 前掲論文 一一六頁「與漢老交、如游名山、當耐其崢山兇靡鬱、如讀異書、當耐其僻字斷文、不可句讀。漢老之人文、實爲有瑕之玉、而人求之以無瑕之石、其齟齬而詆毀宜也」
- (15) 袁慧 前掲論文 一一六頁
- (16) 全祖望撰 前掲書 四〇五頁「雖然、雪汀之生平、實有可傷者、雪汀雅精小學、喜讀注疏、不肯唯阿先儒之說。熟精十七史及文選、其諤諤少所可也、乃其本色、雖連蹇、要不失爲畸士。至于暮齒之頽唐、盡棄所學、殊非其意、是惟予爲能知之。雪汀頗憂予之非議之也、故頻年希過予門、間或傳其有後言者。然予客遊歸、或過省視之、雪汀往往握手相視、歛歔而無言、嗚呼、誰謂雪汀竟以垂老喪志哉」
- (17) 全祖望撰 前掲書 四〇五、四〇六頁「皆嘗索予序。予未之應、雪汀以是慍。予諧之曰、論定蓋有待也。及予自粵歸、而雪汀卒」
- (18) 全祖望撰 前掲書 四〇六頁「鸞翻不可振、狼疾不可瘳、故人彈中聲、爲君一洗磊砢勃窣之牢愁」
- (19) 全祖望撰 前掲書 四〇四頁「雪汀少卽喜爲詩。當是時、鄞之細湖多詩人、大率出宗正菴之門。正菴詩本師法竟陵、稍改其面目、而未洗故步也。雪汀稍悟其非、變而爲山谷、已而又稍嫌其生澁、又一變而爲玉川、晚乃信筆不復作意、

- 遂爲誠齋、然其實學誠齋而失之者。蓋雪汀之詩凡四變、而遇益窮、才亦益落、悲夫」
- (20) 全祖望撰 前揭書 四〇四、四〇五頁「乃忽托末契於年少、但有登其門者、無不極口稱之。里中昨暮鬼、以雪汀故謬謂少所可、而今忽易與也、由是雪汀之門牆驟盛、一唱十和、丹黃無間于昕夕、其欣賞淋漓、真覺所遇皆作者。于是登其門者、謂人不必學、謂詩古文詞不必宗傳、謂流品不必裁量、方言里諺、皆供詩材、雪汀兀兀手鈔、爲同聲集四十完卷。吾鄉吟社久替、至是忽爭傳雪汀之詩派、而雪汀之風格驟衰」
- (21) 袁慧 前揭論文 一一六頁
- (22) 謝國楨 前揭書 一四六頁「西風吹葉到梧桐、歷亂殘陽野草中、細掃一庭供夕爨、淨攄兩眼數飛鴻、淚如滴露偏難冷、語似鼎啼豔未肯窮、自許此身曾不薄、連朝何時却匆匆」
- (23) 謝國楨 前揭書 一四六頁
- (24) 史榮 『風雅遺音』乾隆八年序刊本 四、五葉「類書韻府家家有、殺盡千秋好學人。識者以名言」
- (25) 史榮 前揭書 四頁「有所感、輒形於詩、其論詩以性靈爲主、不事雕琢、渾然天成」
- (26) 史榮 前揭書 三、四頁「考正六書譌誤、取金石刻、旁參子史百家、著同書一百二十卷、今易名字箋補、仿明人正韻賤之例也。(中略)箋補而外、著楚詞·杜詩·史記·漢書
- 評解若干卷。又註歷代天官志·唐百家詩及莊·列若干卷。皆藏於會稽陶氏、其在郵者、惟李長吉補注二十卷、雙聲疊韻補六卷、越東待問錄五卷、及風雅遺音而已」
- (27) 袁慧 前揭論文 一一六頁
- (28) 史榮 『風雅遺音』乾隆八年序刊本 一、二葉「陸氏釋文、自漢以來、相傳之音讀也。詩雖主毛鄭、而韓詩內外傳、與王肅·徐邈·沈重諸儒異同之說、亦多載之音、則兼備九家後來者、度不能別爲一讀也。朱子作集傳、惟不信小序耳。其於傳箋及孔疏義訓、相仍者、殆十之五六、豈反置釋文不用哉。然而今本所載之音、非惟與釋文乖、并集中語時、或背之、則非朱子手定明矣。顧亭林日知錄謂、朱子使其門人爲之。吾謂、門人親炙有素、而又以其師之命、何至忽視如此、恐亦非也。聞於朱竹垞經義考、見有文公後人朱鑑所作詩傳遺集後序、乃知當時本有音、而未備。然則今之音、蓋不知誰何人、因其未備、妄取世俗譌誤之音、竄入其間也。(中略)流傳數百年、世儒咸信爲朱子手定、而莫知其誤、即知之亦莫敢言、不已誣乎。吾自年二十時、稍解句讀、即欲私爲訂正、疑而未決、懷此者五十年、今年且七十矣。若不一言、恐後世終無復有言之者」
- (29) 史榮 前揭書 五頁、六頁
- (30) 紀昀 『紀文達公遺集』「審定風雅遺音序」『儒藏』精華編二七五所收 北京大學儒藏編纂與研究中心編 二〇一一年

一一六頁「甲戌夏、同年姜君白巖持史雪汀風雅遺音贈予、雪汀歿後、其門人毛氏兄弟刻也。於時匆匆未及觀、己卯夏、始卒讀之、嘆其用心精且密」

(31) 紀昀 前掲書 一一六頁「夫聲音之道、說經之末務也。然字音不明、則字訓俱舛、於聖賢之微言大義、或至乖離而不通、所關不可謂細。諸史志藝文者、必附小學於經類、豈無謂與。昔陸德明作經典釋文、千餘年來、學者奉爲著蔡。此書於集傳以外無所發明、固不敢與陸氏齒。而因人人習讀之書、救正其譌謬、以之針砭俗學、較易於信從。獨惜其不知古音、故叶韻之說多舛誤。又門目太瑣、辨難太激、於著書之體亦微乖。退食之暇、重爲編錄。汰繁就簡、棄瑕取瑜、較之原書似爲完書。其文有所潤飾而不更其意旨。亦曰此仍史氏之書、予無與焉耳。於時、休寧戴君東原主予家、去取之間、多資參酌。恨白巖遠在象山、未獲共一審定也」

(32) 永瑤等撰『四庫全書總目』中華書局 一九九五年 一四八頁「蓋考證頗有所長、而蕪雜亦所未免焉」

(33) 全祖望撰 前掲書 四〇五頁「吾友孫翔熊家淮藏有陳權綠字山房寫本陶陶軒詩集十二卷、四冊。卷一之二竹西集、卷三竹西後集、卷四吾悔集、卷五會吟集、卷六岐亭詩韻唱和集、卷七揮杯集、卷八會吟後集、卷九清谿倦游集、卷十之十一誦誦集、卷十二嘔其集。起康熙乙亥、雪汀年二十一、終乾隆戊辰、雪汀年七十四、計分十集、以編年例年次之」

(34) 謝國楨 前掲書 一四六頁

(35) 荒井健 中国詩人選集『李賀』岩波書店 一九五九年 二頁

(36) 原田憲雄『李賀研究』八号 方向社 一九七三年 四三九頁

(37) 袁慧 前掲論文 一二頁

(38) 李賀著 吳企明箋注『李長吉歌詩編年箋注』中華書局 二〇一二年 八九七頁「史榮《李長吉詩補注》四卷、外集二卷、復古堂本五卷、年譜一卷、附錄九卷首一卷、爲慈溪馮氏伏附室藏稿本、今藏浙江寧波天一閣」

(39) 全祖望撰 前掲書 四〇五頁「雪汀所著有李長吉詩注、幾三尺許、其最自負者、予弗甚許也」

(40) 謝國楨 前掲書 一四三頁

(41) 全祖望撰 前掲書 一二四六頁「世荊公讀昌谷詩、所譏雁門太守行語、蔡寬夫詩說辨之、以爲此不知詩者之言、必非荊公所有、然未有以明證之者。近偶憶臨川集古風集句送吳顯道一編、滕王高閣臨江渚、東邊日出西邊雨。荊公有取於此句、則世所傳、真老頭巾之附會耳。予友史雪汀注昌谷詩、屬予爲序、予書此簡、請以附之卷末。雍正癸卯正月望日」

(42) 原田憲雄『李賀論考』朋友學術叢書 一九八〇年 六九四頁「ここにいう王安石の話の典故は、蔡寬夫の書ではなく、明の楊慎の『升庵詩話』にある。」

頁

- (43) 全祖望撰 前揭書 一二四六頁「是書凡十八卷、爲雪汀生平精力所萃。首冠以復古堂本長吉詩集白文五卷、年譜一卷、末則附錄殿焉。其書先列劉辰翁・吳西泉諸家補注、引申繁博、考證鮮明、欲使人知長古詩中所隸有源有本、以力闢杜牧牛鬼蛇神之說。每句之注不下千餘言、全書計二十萬言、凡二十冊。余于己酉冬日、以重價從王斗瞻後人處得之」
- (44) 謝國楨 前揭書 一四二頁「清甬東史榮補注。是書爲馮貞羣先生旧藏原稿本、前有康熙五十八年潘人瑞、門人陶燮序、道光三十年王奎序、姜白岩小札、陳常跋、毛昇・柴可安識」
- (45) 謝國楨 前揭書 一四二頁
- (46) 袁慧 前揭論文 一一七頁「一日、馬銘軒過我、謂近收舊書于西郊毛氏、其中多不經見之書。余往視之、于是得見所謂長吉詩注五本、皆有手印鈐識其首、不勝狂喜。查其目錄、有十八卷、才得四分之一、第二本已鼠嚼殘損。銘軒不以爲意、余遂取之而歸、不知餘十五卷落誰手。到處尋訪者十餘年、偶與繭齋林丈談及、云、此書我家有十本、得之于外家後倉王氏、(別)十本藏于西郊毛氏。(中略)故銘軒所收僅五本、而五本尚存毛氏。余于是不惜重價、將繭齋所藏十本收歸、而毛氏五本再三求之、不肯出。又二十餘年、范君月樹致書于我、言毛氏近日式微、此書可出價售矣。索之、
- 只有四本、而尚缺其一、後人故紙堆中得之。百餘年後、散而復合、真大快事。此書不遇余、亦幾于散失無傳、而先生數十年之精力、至五易稿而後成、一旦與草木俱腐、不亦大可惜乎」
- (47) 袁慧 前揭論文 一一七頁
- (48) 袁慧 前揭論文 一一九頁「補注則曰、說文云、懷、思念也。又詩・小雅、每懷靡及。箋云、懷、私也。又文選注引蒼頡編云、懷、抱也。按、後人多謂胸臆爲懷。是詠懷、亦謂吟詠之懷抱耳、不然、則爲詠己所思念也。文選阮籍詠懷十七首、題注載顏延年曰、說者謂阮籍在晋代、常慮禍患、故發此詠耳。其首編注則云、嗣宗身仕亂朝、常恐權勢遇禍、因茲發詠、故每有憂生之嗟、雖志在刺譏、而文多隱避。百代之下、難以情測」
- (49) 袁慧 前揭論文 一一九頁
- (50) 謝國楨 前揭書 一四二、一四三頁
- (51) 吉川幸次郎『吉川幸次郎全集』十六卷 筑摩書房 一九七〇年 一一七頁

One Opinion about Shi rong's Description

Shinji WAKAMATSU

Division of General Education

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi

807-8586, Japan

No English abstract